

EAA フィールドトリップ (6/1, 2)
明治日本の近代化の光と影

宇野優歩

The University of Tokyo

今回フィールドトリップで訪れた富岡製糸場と渡良瀬遊水池は、それぞれ明治日本の近代化の成功と失敗の各側面を象徴するものである。その好対照は、単に産業化とそれに伴う環境問題という、典型的な対比が描き出せることだけによるものではない。富岡製糸場が代表する製糸業と、足尾銅山が代表する銅鋳業とは、共に明治初期における重要な外貨獲得手段であり、それを目的とした政策の正の側面と負の側面という対比を見出せることが重要である。

富岡製糸場は、日本における器械製糸の発展を主導するという使命を帯びて、初めての官営模範工場として1871年に建設が開始され、翌72年に操業を開始した。新政府樹立から間もない時期にこのように製糸業の振興が急がれたのは、生糸が外貨獲得のために最も重要な輸出品目であったからだ。幕末の開港以降、安価な外国産綿花との競争により国内の綿花生産が失われていたために原料を輸入に依存し、かつ機械化のための設備も輸入しなければならなかった綿業が大きな貿易赤字を生む中、国産の繭を原料として生産が可能だった生糸は貿易収支を改善するために必要不可欠な輸出品だったのである。



▲ 富岡製糸場は、日本の製糸業の発展への貢献とその歴史的意義を理由に、2014年に世界文化遺産に登録されている。

他方、銅も同様に明治期の日本にとって重要な輸出品目の 1 つであった。1715 年の海舶 互市新例に既に示されているように、江戸時代までの採掘により国内の金山・銀山はほとんど産出が枯渇していた中で、銅は十分な産出を確保し輸出品目となる鉱物資源として、重要な外貨獲得手段であった。加えて、国内のインフラ整備の中で、電線の設置等のために大量の銅が必要とされた。足尾銅山の鉱毒問題が広域の住民に甚大な被害をもたらしていながらも、明治政府が古河財閥の側に立ち規制を行わずにいたこと背景には、殖産興業政策のために積極的な銅山経営の維持が必要不可欠であるという判断があったのである。すなわち、足尾銅山鉱毒事件は、産業革命の達成と外貨獲得という日本の近代化のための政策目標が、人々の生活に犠牲を強いた結果なのである。



▲ 田中正造記念館の展示。右側に、銅鉱業が殖産興業に有した意義と、そのことが問題解決を阻害した旨が記載されている。

以上のように、富岡製糸場の建設・操業と足尾銅山鉱毒事件とは、明治日本の近代化の中で外貨獲得・物的資本の集積のために必要とされた特定製品の生産拡大という政策 (= 富岡製糸場) と、その政策が一部の人々の生活を犠牲にしてでも遂行されたという事実 (= 足尾銅山鉱毒事件) とを、端的に示すものであるといえる。現代社会の問題を捉えるには、その前提に存在する近代を理解する必要がある、そのためには、近代が如何に始まったか、そこにおいてどのような成功と失敗があったのかを、理解しなければならないという点において、上記の対比を学べたことは意義深かった。